

## 第百六十四話 無抵抗の抵抗：ハバロフスク事件

中野学校関連書籍を読んでいて、中野学校出身者が関わったハバロフスク事件なるものを知り、調べてみた。ソ連抑留者は、その過酷さに10年間耐えに耐えてきたが、遂にその余りもの非道さに、一致団結して立ち上がった。その団長には、中野学校出身の石田三郎(乙I長)少佐が推された。彼等は、サボタージュ及びハンガーストライキを敢行して抑留者の要求を勝ち取ったのである。石田氏は帰国後「無抵抗の抵抗—ハバロフスク事件の真相」(1976年)を著している。(画像：

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~mhvpip/EseSaiban.html> から)



### 1 事件の概要

1955(S30)年12月19日、生命の危機に直面したハバロフスク第16収容所第一分所の抑留日本人769名が、非人道的な管理に抗議して、作業拒否と絶食という非常手段に訴えて待遇改善を求めた。然しながら、翌年3月11日0500、ソ連内務次官ボチコフ中將の無警告武力弾圧によって、統一的集団抗議活動は瓦解した。抗議活動首謀者46名は、逮捕、分散収容され、刑を科された。結果的には、待遇の面は改善された。

### 2 抗議活動参加者について

769名中、旧制高校以上の学歴を持つ者は92%、平均年齢は42歳であったという。抑留者は、幾つかの班に編成されており、それぞれに班長が居た。抑留者の中には、シベリアの天皇と言われた民主運動のリーダーに率いられたグループもあったが、彼等は当然抗議運動への参加を認められなかった。

彼等は、抑留されてから10年もの間、過酷な労働、給養、ソ連兵の非人道的・威圧的行為にも耐えに耐えていた。(第百六十一話参照)

### 2 抗議の切掛けとなった事案

11月26日、ソ連兵は政治部将校の立会の下、営内の軽作業に従事していた病弱者26名を、営外作業に適するとして無理に作業に従事させた。酷寒の重労働であり、病弱者の症状は当然悪化した。更には12月15日、他の病弱者65名にも営外作業を命じた。皆が必死に請願するも聞き入れることはなかった。病弱者殺害が目的だったとしか思えないと感じた。

### 3 対応を班長会議で決定

皆一緒に日本に帰ることを夢見て励ましあい、力を合わせてきたのだが、仲間を死なせる訳にはいかない、これ以上我慢が出来ないと気運が生まれ、班長会議で対応を議論した。収容所側に誠意ある対応が期待できないのであれば、自滅するよりは闘おう、座して死を待つは日本人の恥だとの認識で一致した。如何に戦うかを検討した結果、「作業拒否、一致団結、要求事項の決定」、戦術的には「暴力は使わず、収容所側を過度に刺激せず、請願運動と呼称、秘密の顧問団(瀬島龍三等)」と決定した。尚、瀬島氏のアドバイスで、ソ連の中央政府、マスコミ、赤十字への請願文書送付を行った。

### 4 抵抗運動とソ連軍の武力弾圧

ソ連の硬軟取り混ぜた懐柔策・圧力にも屈することなく粛々と作業拒否運動を行った。更には、病弱者を除く506名が断食に入った。3月11日、内務次官の率いる兵2500名と消防車8台が突然現れ、引きずり出された。代表たる石田は、毅然として中將に意見を述べた。次官からは“追って結論を出す”との言質を得た。首謀者には禁固1年の刑が科されたが、収容所は改善され、形の上では屈服したが要求は通った。

### 5 最後のシベリア抑留者の日本帰還 1956(S31)年11月26日

\* 国際情勢の変化もあったのだろうが、彼等が示した団結、毅然たる対応、気概そして採用した戦術が奏功したのだろう。極限における人の生き様を示している。

(第百六十四話 了)